

ブラック・ムービー賞にノミネート

ゴスペル (2005年)

監督・脚本: ロブ・ハーディ
 製作: ホリー・デイビス・カーター
 フレッド・ハモンド
 音楽: カーク・フランクリン
 製作年: 2004年 アメリカ
 上映時間: 103分



これは、よく知られたルカの福音書15章の「放蕩息子」の現代版であり、父と息子の決裂と和解の物語である。

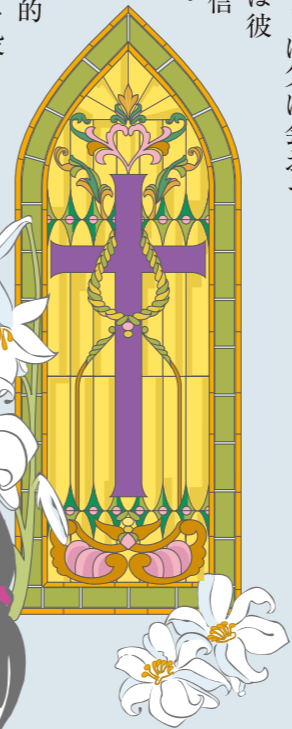
主人公は、デイビッド・テイラー（ボリス・コドジョー）、その父は牧師のフレッド・テイラー（クリフトン・パウエル）。

デイビッドと親友のチャールズ・フランク（イドリス・エルバ）は、デイビッドの父が牧する黒人教会で育つ。デイビッドは、有望なゴスペル・シンガーで、教会ではワーシップ・リーダーとして奉仕している。しかし、病気の母親を神が癒されなかった時、心をかたくなにし、いつも教会のことで忙しがっている父親をなじり、家を出てしまう。

歌手として才能のあるデイビッドは、黒人R&Bスターとして名を上げ、コンサートツアーで大もうけをし、好き放題の生活をする。

15年後、母教会の忠実なメンバーから、父親が病気で死にそうだと電話がある。デイビッドは父に会おうと家に帰るが、神は彼の中に働いて昔の信仰に戻そうとされる。

友人のフランクは、教会の後継者になるが、デイビッドを受け入れない。世俗的で不道徳な音楽に身を投



じている旧友を救せないのだ。ストーリーの大部分は、デイビッドが神との正しい関係に戻る過程、また旧友同士の和解への長い道のりを中心に展開する。

本編には、次のようなすばらしいセリフがある。

「良い人間らしく見せるよりも、良い人間になるような努力をしようじゃないか」

（あるときテイラー牧師が、自意識が強く教会での見栄にこだわるフランクに言うことば。）

「あなたは聖書は何度も読んでいるけど、何も分かってないわ。あなたも、イエス様が必要なのよ」

（プライドの強いフランクに、妻が言うことば。）

頭で知るよりも心で知る必要が、強調されている。

手拍子とダンス付きの生き生きし



に包まれており、夫婦の生活についての言及も何回か出てくる。

聖書的な縦の筋に対する横糸として、深いテーマも出てくる。離婚者のレイン・ウォーカーとデイビッドが恋愛関係になる。レインの別れた夫が登場し、話がややこしくなるが、幸い、レインと前夫は元のさやに納まることになる。

もう一つの横糸は、霊的な男性らしく見えるフランクと妻シャーリーンの間にぽっかりと空いた隙間である。ルカ15章の兄息子のようだが、フランクは正しいことを言うのだが、心は神から離れている。シャーリーンは、夫に肌を許す気になれない。なぜなら、フランクがうぬぼれた象牙の塔に住んでおり、彼女自身が不妊に苦しんでいるからだ。

私が特に心を打たれたシーンがある。一つは、デイビッドが父に会おうと帰ってくるところだ。聖書の、放蕩息子の帰宅のような感動がある。息子はまだ悔い改めたわけではないが、父は無条件に息子を受け入れる。次は、父が亡くなったあと、デイビッドが父の墓の前に立って、神に叫ぶところだ。生涯で初めて、彼は本当に悔い改め、神に仕えると決心する。

最後のシーンでは、プライドの高い「兄息子」牧師フランクが、心を低くされて、「自分をキリストにささげよう」と教会の人々に呼びかける。招きに応じて、いがみ合っていた教会員が和解し、プライドや恨みを捨てる。キリストこそ、我々のすべての問題への答えである、というハッピーエンドとなる。

ゴスペル音楽ファンの大人に勧めたい。
 (ジヨナサン・ベネディクト)

たゴスペルが満載なので、ゴスペル・ミュージックのファンにとって、「ごちそう」である。本編を見終わってから、サウンドトラックを買いに走ったという人もいる。礼拝の場面はキリスト中心であり、賛美も心からのもので描かれている。

賜物の豊かな歌手レイン・ウォーカーから「あなたが歌う動機は何？」と聞かれて、まだ求めている時のデイビッドは、答えずに詰まる。レインは、「私なら、イエス様をたたえることよ」と言う。

PGレイティング（児童には親の許可が条件）がされているが、家族で見る映画とは言えない。若者や子どもよりは、大人向けである。性的な内容で言えば、ディスコで歌う「放蕩息子」は、挑発的なダンスと音楽